

緒明山 OAKIYAMA-TSUSHIN 通信 5



陸軍重砲兵連隊（絵葉書）

発行日
令和 2 年（2020 年）11 月 22 日

発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所 神奈川県横須賀市上町 1-61
電話 046-822-2077

本誌は印刷発行していません。市史編さん事業
のホームページからダウンロードしてください。
☞ <https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shishi/shishi1-top.html>

◆市民が語る私の戦争体験◆

元陸軍特別幹部候補生第一期生が語る 飛行訓練、そして終戦・引き揚げ

～高橋金太郎さんに聞く～

収録日 平成 28 年（2016 年）3 月 16 日

場 所 高橋金太郎邸

聞き手 高村聡史（市史編さん係非常勤職員：当時）

陸軍特別幹部候補生第 1 期生

—— 高橋さんは、お生まれはどちらですか。

高橋 神奈川県三浦郡佐島*っていう所なんです。

* 佐島＝三浦郡西浦村佐島、昭和 10 年に大楠町に改称。
横須賀市の西部で相模湾に面する。

—— 佐島ですか。

高橋 合併して横須賀市になったんだね。

—— 昭和 18 年ですね。

高橋 私は三男で、尋常高等小学校高等科 2 年を卒業して、東京の狛江村にあった飛行機の計器を作る所に入ったんですよ。

—— 飛行機の計器ですか。

高橋 会社へ入って寄宿舎生活で、ちょうど 5 年。20 歳になる来年は兵隊検査です。あるとき新聞で「陸軍特別幹部候補生」の募集を見たんです。それが昭和 18 年に制定されて。どうせ 20 歳で兵隊検査になっちゃうから、陸軍の特別幹部候補生に応募したんですよ。その陸軍特別幹部候補生というのは、科目が飛行機の操縦、それから飛行機の整備、それから船舶兵。この三つがあったんです。どうせなら飛行機の操縦に志願しようって、それで合格して。昭和 19 年の 4 月に福岡県の朝倉郡、今、甘木市になっていますけど、甘木町の大刀洗陸軍飛行学校に入隊。陸軍特別幹部候補生第 1 期生で。

—— 第 1 期ですか。今のお話で三男ということ

ですが、ご自宅は、佐島でどのようなお仕事をされていたんですか。

高橋 実家は、佐島の床屋なんです。兄貴は 2 人とも兵隊に行っていたんですよ。長男は陸軍、次男は海軍。私が三男坊。

—— 陸軍のどちらに？

高橋 長男は世田谷の重砲といって、世田谷に部隊があったんです。そこへ入って、そこを出て、アリュシャン列島で潜水艦のボカチン（魚雷）くっちゃって。それで沈んで。ちょうど三崎の向ヶ崎から来ていた人が船に乗っていたんですよ。兄貴と話が合って、とにかく、2 人でどっか生きていたら、うちへ内緒で報告しようってことで、お互いに。それで向ヶ崎の人は助かったの。

—— なるほど。

高橋 船員だから。沈んでいくときに、「おまえたちは早く逃げろ」って言われて助かったんだね。うちの兄貴は軍人だから、弾を撃てるだけ、バンバン撃ちながら船が沈んじゃったって。その向ヶ崎の人に後で話を聞いたんですよ。そのときはまだ戦時中だから、公にできないので。とにかく昔、軍事機密がうるさいんですよ。それで、「これは絶対に世間に言わないでくれ」って、「間違いなく亡くなりました」と言って、報告を受けたんですよ。それで、うちの両親はあきらめて。

—— 次男の方は海軍ですか。

高橋 海軍。茨城の霞ヶ浦。

—— 航空隊か。

高橋 それで一時、武山海兵团へ転属で入ってきて。それでうちは佐島だったから、おふくろたちが、兵隊さんは腹が減るだろうからといって、サツマイモをふかして持っていったこともあるんですよ。

—— お会いできましたか？

高橋 私はもう東京へ行っていたから。

—— 陸軍特別幹部候補生の試験は、難しかったですか。

高橋 学科試験は算数と作文。算数が大嫌いだったんで、それで、成城学園ってありますね。

—— はい、あります。

高橋 私がいた寮から、電車で2駅目なんです。勉強しようと思って、算数の本を買ってきたんです。それで、微分積分をやって。学科試験は不入斗の練兵隊があったでしょう。

—— 重砲兵連隊で試験をしたんですか。

高橋 算数は、分数も出たし分かんなかった。作文も難しいと思っていたら、ちょうどはがきの大きさに問題が印刷してあって、特別幹部候補生に合格したことを父母に宛てる手紙として書けっていうんです。こりゃいいやと思ってね。いっぱい天皇陛下、お国のためって書いたら受かっちゃって。最終的な身体検査は東京の立川に陸軍飛行学校ってある。

—— あります。立川に。

高橋 それでうちのおやじは、「金太郎、第2次身体検査なんか大したことねえから、平気だよ。受かったのも同じだ」なんて言ってね。その時分に出征する人は万歳、万歳って送られたんです。日の丸の旗をたすきに掛けてね。私もそれをやられちゃったんですよ、万歳を。

いろんな身体検査、下の身体検査から全部やって、最後にちょうど3センチかそこらのすき間があって、そこへスーッと数字が落ちてくるんですよ。

—— 動体視力か。

高橋 3桁ぐらいなら分かるんです。しまいに何十何万って出てくるでしょう、これが。

—— じゃあ、1桁じゃなくて何桁もの数字が落ちてくるんですね。

高橋 そう。最初は3桁ぐらいね。だからスパッと分かる。今度4桁と増えていく。最後にどうしても分かんなくてね。大学生のバイトが来ていて、その大学生がひもを持ってる。大学生から「分かるか？」って聞かれて、「すいません、いちばん最後のやつが、けつの番号は分かったけど、頭の番号が分からない」って言うと、「よし、じゃあ、ゆっくりやってやるから用意はいいか、よく見てろ」ってね。

—— なるほど。

高橋 それで最後に立川の広い講堂で、みんな後ろに並べられて、今から名前を呼ぶ者は前へ出ろっていうわけ。それで私、名前、呼ばれないんですね。待てよ、この名前を呼ばれたのが受かったのかな。こっちの人間はみんな体もいいし、がっちりしてるし。それで、どっちが合格したんだか分かんない。そしたら、「今、名前を呼ばれた者は帰っていい」っていうわけなんです。良かったと思ったね。さっきおやじが言った金太郎は受かったも同じだっ

て言って、身体検査だけだから大丈夫だって。そしたらそうじゃないんですね。口頭質問がある。

—— 口頭質問か。

高橋 口頭質問をやって、それで、名前を呼ばれたものは帰って、残った者はすぐにうちへ電報を打て、うちへ帰さないっていうんですよ。そのまま。

—— 立川ですよ。

高橋 このまま明日、何時何分に出るっていうんです。昔は構わず、何でもそうで、軍隊もそうだったけど、事前に話がないんですよ。

—— 機密なんですね。

高橋 だから、軍隊に入ってもほとんど前日に発表。今、合格して、陸軍飛行場・・・。

—— 大刀洗の。

高橋 大刀洗陸軍飛行学校へ4月に入ったんです。

—— 19年の4月ですね。

高橋 そこへ入って、1週間の休暇を与えるっていうことがあったんですよ。

—— 休暇ですか。

高橋 うちに帰れるなどと思ったの。そしたら夜になったら休暇返上になっているんです。明日、今の韓国ですが、朝鮮の京城*へ行くっていうんです。

* 京城=京城府/けいじょうふ。現、ソウル特別区。

—— 今のソウルかな。

高橋 それで、立川から福岡の甘木に行く話だけど、途中で電車を乗り換えなきゃならないから、東京駅に集まった。そこで面会があったんですよ。

—— なるほど。

高橋 ちょうど上野に親戚がいて、おふくろとおやじがそこへ泊めてもらったんですよ。それで電報を打った。おやじとおふくろが山手線に乗って、おやじはポールに・・・。

—— つかまる所。

高橋 そこへおやじはつかまっていたの。うちのおふくろは、つかまっていないから、中に押し込まれちゃった。電車から降りれなくなって会えなかった。だから、私が兵隊から帰ってきたときに、一番、苦にしていたのがおふくろだったらしいね。

—— なるほど。

高橋 あのと、さようならしていれば、兵隊へ行って死んでいったっていいけど、会うことができなかった。それがだいぶ頭にあったらしいんだよね。

京城、そして会寧での飛行訓練

高橋 話は戻るけど、陸軍特別幹部候補生に4月に入って、そのあと京城に行っちゃったんですよ。京城に行きますと、あそこは関東軍だったんだよね。日本では大本營の管轄だけど、向こうは関東軍の管

轄だったんですよ。大刀洗陸軍飛行学校に入ったときは、一般的な陸軍の兵隊の教育をやっていたんですよ。8月に京城へ転勤になって。

—— 4月に入隊して。

高橋 入隊して、8月に京城ね。そこへ行って初めて飛行機の練習を始めたんですよ。航空兵だから。

—— 京城までは福岡から何で行かれたんですか。

高橋 釜山まで船で行って。

—— そこから電車なんですね。当時、日本でしたけれども、どんな様子でした？

高橋 そのときは日本の兵隊さんは、だいぶもてる。

—— そうですか。

高橋 日本の領地だからね。それで京城へ行って、着いて陸軍の教育を受けて、京城から会寧*へ行ったんです。

* 会寧=かいねい。現、朝鮮民主主義人民共和国の北東部に位置する会寧（フェリョン）市

—— 会寧ですか？

高橋 会寧って、もう、豆満江の沿岸。

—— 国境ですね。

高橋 満州があって、豆満江が流れて、東はロシアでしょう。8月に京城へ行って、練習機の零式の練習をして。それで今度は初めて実用的な飛行機に乗ったんですよ。それまで布張りの2枚羽の練習機で。

—— 複葉機ですね。

高橋 会寧で初めて実用機的なものに乗ったんですが、終戦が20年。

—— 8月ですね。

高橋 8月だね。それで、もうそのときに会寧に行っていて、実用機の練習をして。それで、正直な話が「おまえたちは2銭だ」というんです。昔は葉書が2銭だった。2銭のはがきを出せばいくらでも人が集まるってわけなんですよ。



高橋金太郎さん「2銭！」

—— どういうことなんですか。

高橋 「飛行機とか銃とか、そういうものは天皇陛下から預かっているものだから大事にしろ」っていう。「おまえらは死のうが何をしようが、かまわね

え。おまえたちの代わりは2銭のはがきでいくらでも来る」って、そういう言葉を言われたのよ。

—— ……。

高橋 だから会寧に行ったときは、もう特攻隊で決まっていたらしいんだよね。

—— それまでは知らされていなかったんですね。

高橋 そこまではね。仲間が、誰々はどこの飛行場に行って、そのまま特攻隊で行ったとか、俺もいつ行くのかな。飛行機の練習、全部やったから、10月に特攻隊で突っ込むんだ、行くんだと。飛行機がもう古いから下側に爆弾を抱えて。新しい飛行機は操縦しながらボタンを押すと、タンと……。

—— 落っこちるわけですね。

高橋 そうです。ドンとぶつからないで。その時分、そういう飛行機はみんななくなっちゃったの。古い零式で。必ず爆弾をくくりつけられるんです。それで10月に爆弾を積んで行くことを知らされていたんですよ。

—— それは20年。

高橋 20年の10月。8月が終戦だったから助かったの。行かなくて。

—— どこに向かうかは、まだ分かっていなかったのですか。

高橋 分かっていない。だけど、台湾がやられたとか沖縄が爆撃されたとか、っていう情報は……。

—— 入ってきた。

高橋 東京空襲も聞いたんですよ。これはいよいよ東京、内地まで来たなっていうことで。それで今度は部隊を北の朝鮮じゃ大変だから、近くの。今で言えば香港あたりかな。あの辺にしたんですよ。そうすればそこからすぐ飛び立てるでしょう。要するに待機じゃないけども。

私も実際そのとき思ったね。天皇陛下のために死ぬんであれば、いつ死んだっていいと。実際、死というものには違和感がなかったね。早く突っ込みたと思って思ったんですよ。一つの飛行場に何十機って集まって、それで編隊でもって攻めていったの。

—— なるほど。

高橋 攻めていくときに、最初は上から行くでしょう。そうすると高射砲でやられちゃう。いろいろ考えて、機関銃だって下まで行かないから、じゃあ、海面すれすれに行くことをやったんだね。私らのときは、まだ行かなかったけど。

—— そんな映像をみたことがあります。

高橋 そしたら向こうは大砲を打つんですよ。そうすると水柱が、バンと船の前あたりで出るでしょう。すると、その水柱が少しでも羽に当たると、バンと切れちゃう。

—— なるほど。

高橋 だから、最初は突っ込んでいって成果を上げたけれども、そのうちにバンバンやられちゃって。それで海面すれすれで行けば、今度は自分の航空母艦の前でもって水柱を上げちゃう。

—— なるほど。

高橋 だから、これじゃ勝てっこねえなと思ったけど、早く行きてえなと思って。

—— 周りのみんなそうだったんですか。

高橋 みんなそうだね。それで終戦になって泣いていましたよ。10 月に行くことになっていたのが残念だ、行かれなかった。だから、その時分に私なんかもそうだったけど死というものに対して、死ぬんだっていうことに対して全然、違和感がなかったね。とにかく天皇陛下のためって。

—— ただ、航空隊に入ったときに、自分は航空機に乗ろう。戦争に行こうっていう気持ちでしたけども、さっきのお話ではあなたがたは、2 銭のはがき。

高橋 それは軍隊の教育で。

—— ということは、特攻と言われたときにショックはなかったんですか。当たり前だっていう感じだったんですか。

高橋 要するに、とにかく行かなきゃしょうがねえ。途中から帰っていいなんて言われちゃ困っちゃう。だから、特攻隊で死んでいうものに対して全然、違和感がなかったね。



高橋金太郎さん「違和感がなかったね！」

高橋 でも、いろんな人の話を聞くんだけど、特攻隊に行って「天皇陛下、万歳」って行かないってわけだ。みんな、「おっかさん」って言って突っ込んでいくって。

—— みんなですか。

高橋 特攻で爆弾を積んでいますと、戦闘できないから、これを護衛するために戦闘機が来て、それで向こうの飛行機が来たときに戦闘機隊が戦うんですよ。戦闘機隊がこっちを守っていくわけだね。

—— その飛行機自体はそんなに数は。

高橋 ないんですよ。

—— 会寧に行ったときは何機ぐらいですか。

高橋 大体、6 個部隊かな。6 機。

—— そうですか。

高橋 大体、1 機で最初は 8 人だったの。一つの飛行機に乗るのが一つの班だよね。それで、みんな初めて飛行機に乗るでしょう。乗ったり降りたりやって、そうするとそこで適性が分かってくるんですよ。こいつは不器用だとか、着陸したってバックンバックンやって、ろくに着陸できない。そういうことで 2 回落とされるんですよ。

—— それは高橋さんもやられたんですね。

高橋 最初 8 人いるでしょう。6 機ぐらいで、第 1 班、第 2 班、第 3 班……。それでみんな、我々も班長もこうやって見ているんですよ。最初は班長が前で。そのとき海軍と陸軍とまるきり反対のことをやっていた。

—— どういうことですか。

高橋 海軍と陸軍となんでこんな仲が悪いのかなと思う。飛行機があつて 2 人乗りなんだけど、海軍は習う人が前、後ろが班長。それで、無線なんてほとんどなかったから伝声管通して、左旋回、右旋回ってやるわけですよ。

—— なるほど。

高橋 陸軍では班長が前に乗っているんです。それで我々が後ろに乗っていて。なんで陸軍と海軍と同じにやらねえんだ。仲が悪いんだなと思ったね。

—— 逆なんですね。

高橋 私は陸軍特別幹部候補生第 1 期生だけど、その前は、飛行兵では少年飛行兵っていうのがいた。少年飛行兵は要するに 3 年間、学生でいるわけ。3 年たつと卒業で、そのときに上等兵なんだよね。

—— はい、そうですね。

高橋 特幹の場合には 2 年で上等兵。成績いいので伍長。

—— なるほど、伍長ですね。

高橋 キンスジ一つの星一つ。だからそれだけ違っていたんだよね。特幹の 1 期生。

—— 本当だ。大刀洗特幹 1 期操縦って書いてあります（戦後、記念で作られたテレホンカードを見て）。

高橋 操縦のマークが要するに航空隊のマーク。

—— なるほど。これを付けるわけですね。

高橋 特攻隊で行く場合には必ずはちまきをして行くわけ。10 月に行くことになっていたんだ。

—— でも、飛行兵にしても飛行機に乗りたくても乗れない人がいっぱいいたと思うんですが、高橋さんは飛行機に乗って実際に操縦されていますね。

高橋 操縦した。

—— どんな気持ちでした。飛行機に乗られて。

高橋 乗ったときに、さっき言ったように教官が前にいて、それで降りたり、上がったたり、宙返りだとかいろんな特殊飛行をやるの。それで、こいつは大丈夫だなと班長が思うと班長は降りちゃう。

—— 降りるわけだ。

高橋 それで行って来いっていわれて、行ってくるの。行くときには赤い吹き流しがあるの。

—— 吹き流しですか。

高橋 練習機の場合、吹き流しをしばっておく。初心者だから。

—— なるほど。初心者マークということですね。

高橋 初心者だから、間隔を空かしてやるわけよ。着陸するときにね。初心者マークが赤い吹き流しというわけ。最初、班長が乗って、途中で班長が降りて副隊長に。

—— 副隊長ですか。

高橋 副隊長は大体、中尉か大尉。そこへ報告に行くわけですよ。誰々をこれから単独で。そうすると、「よし、行ってこい」。そうすると赤い吹き流しを付ける。うれしかったね。よし、俺1人で乗って行くんだぞと。大体、練習の場合には300メートル。

—— 高さですね。

高橋 高さ。巡航速度は150キロ。

—— 150キロですか。

高橋 練習機だね。それが巡行の速度。スピード出したって500キロしか出ないんだから。上へ300メートル上がるでしょう。第1旋回、第2旋回。今は、ジェット機だから向かい風だろうと追い風だろうと行っちゃうけど、普通の場合には風を利用して上がるんですよ。第1、第2、第3旋回。第4旋回で着陸するわけ。そうすると大体それでも60キロぐらいあるんですよ、速さが。スーッとうまく降りると、そのまま、スーッと行くんだけど、どんと上がるでしょう。上がるから上がったなと思って操縦桿を前へ倒すでしょう。前へ倒すと、下へ行く。

—— 墜落してしまいますね。

高橋 上がったら、そのまま上がったまま操縦桿を押さえれば、動かさなければ、そのまま真っすぐ、またゴトンと落ちるんだけど。

上官との確執 — 少年飛行兵と特幹

高橋 うちの班長が私と同年だったんだ。大正13年生まれで。

—— 21歳ぐらいですか。

高橋 だから、練習のときは班長だからおっかないけど、私と年が同じだから、ある程度、私を早く一人で乗せようとするわけね。そうすると、6個部隊

あるでしょう。

—— はい。

高橋 6個部隊の中で誰が一番早く単独で行くかということは、その教官の教えが良いということ。

—— なるほど。

高橋 だから、早く自分のところから一番で単独でさせようと躍起になるんですよ。それで、飛行場に6人並ぶ。必ず終わると、「高橋、1歩、前へ」って言うんですよ。しょうがないから前へ出る。「帽を取れ」って言うんですよ。

—— 帽子ですね。

高橋 帽を取れって言うから、かぶっているやつを取る。そうして、deenと（ビンタが）来るの。最後に「なんで名前を言われたか分かるか？」って言うんですよ。「はい。こういうわけでもって、こういう所が悪かったです」。「よし、分かればいい」。

1回は朝鮮にいたときで、冬、雪が降っていて。今、話した着陸でドッカンドッカンってやるでしょう。そうすると、「高橋、おまえは飛行機に謝れ」って。雪の積もった所で腕立てするんですよ。朝鮮の冬。それは忘れないね。

—— 謝ったんですね。

高橋 班長は16歳で少年飛行兵に志願したから、私より飛行機の経験は4年も5年も。

—— 多いんですね。

高橋 だから伍長。必ず練習するにも、「高橋、来い」って、とにかく一番先にやらしてもらう。

—— 優秀だったのではないですか。

高橋 いや。要領は良かったかもしれない。

—— 空を飛んでいるのは気持ちいいですか。

高橋 1人で飛ぶでしょう。なかなか気持ちいいね。きょうは俺1人で飛んでいるんだ、いい気持ちだなんて。そうすると上がって、あれは京城の駅だなんて分かるの。300メートル上がると。電車がつながっているでしょう。マッチ箱ぐらい。

—— 見えるんですね。

高橋 班長は、班長の部屋があるの。それで、我々は生徒の部屋があるわけ。班長の部屋は。大体4、5人で1部屋持っているんですよ。

—— なるほど。

高橋 あるときに呼ばれたんですよ。「高橋候補生」って、隣の班の班長に。下士官だから班長の部屋にいます。うちの班長はヨシツグ軍曹。

—— ヨシツグさん。

高橋 うちの班長はね。それで隣の班の班長はタケウチ軍曹っていう。点呼が終わって、「高橋、来い」って、タケウチ班長から呼び出し食らうんです。点呼終わってもう寝る前。そうしたらね、スリッパで

往復ビンタ。というのは、取り決めはあったんですよ、うちの隊長は。私的制裁してはいけないってことはあった。だけど、スリッパでペーン、ペーン、ペーンって。もう理由も聞かないでね。12 まで数えたけど幾つになるか分からない。それで、「高橋、幾つ殴ったか分かるか」って言うから、「はい、12 まで、あと分かりません」「なぜたたかれたか分かるか」「分かりません」って言ったら、「何だ、あの日誌の書き方は」って言うから・・・。

—— 日誌の書き方ですか。

高橋 日誌があるでしょ。毎日、日誌を書く。それで文箱が置いてあって、その中に日誌を入れていく。それが内務班の当番で、当番が回ってくるの。そして、「私は、少年飛行兵ごときには負けない」って書いてあった。私たちは特幹でしょ。特幹だから少年飛行兵なんかに負けないって書いた。

—— それが気に入らなかった。

高橋 駄目だった。ヨシツグ軍曹は・・・。

—— 少年飛行兵で入ってきてるから。

高橋 だけどタケウチ軍曹は、少年飛行兵じゃない。民間の飛行機出身で、大学生で志願して入って、見習い士官で既に少尉なんです。我々は、一等兵とか上等兵だけど。

—— いきなり上ですね。

高橋 そういう飛行兵なわけよ。

—— そうですよ。

高橋 それでも、よその仲間よりも早く私を単独でさせてくれた。他の者はみんな順番順番なの。私は必ず、毎日 1 番で単独で行く。余裕が出てくるね。

—— いろいろと皆さんのお話を聞くと、内務班に制裁を食らったとか。今の高橋さんのお話では、とても空中で開放感があって、少しだけでも楽しんでおられたようだなって印象がありますね。



高橋金太郎さん、特幹 1 期生当時の肖像画

終戦、そして引き揚げ

—— そのような中で、間もなく終戦を迎えますね。20 年の 8 月 15 日のことは覚えていますか？

高橋 会寧の飛行場で練習してるでしょ。そうすると、ソ連は連合国に協力してない中立国だけど。毎日のようにソ連の飛行機が帰っていくんですよ。

—— 終戦前の、まだ宣戦布告してないときですね。

高橋 そう、まだしてない。それで会寧ではしょうがねえということになって、綏中*って所へ部隊が移駐するとき、貨車で行くんですよ。私たちが会寧を出たのが 8 月の 8 日か 10 日。それで部隊長は家族もいますから、部隊長は 13 日まで会寧にいたんだよね。そして、私たちは既に奉天*に入っちゃったけど、部隊長は 3 日ぐらい遅かったから、京城でストップしちゃった。

* 綏中=すいちゅう。旧満州国の最南西部。現、中華人民共和国遼寧省葫蘆島市綏中県。

* 奉天=ほうてん。旧満州国奉天市。現、中華人民共和国遼寧省瀋陽市。

—— これがもう分かれ目ですね。

高橋 昔、満鉄があったけど、その時には列車がもう京城から行かなくなった。我々は奉天へ行っていたけど、避難民みたいなのがいっぱい貨車に山積みに乗っていくんですよ。その時分、満州にも開拓義勇団ってあったでしょ。そういう人たちは、満州で一旗揚げようっていう人たちで。今度は、ソ連が終戦の 2 日ぐらい前に連合国とくっついたわけだね。終戦の前に。だから今度は内地の奥のほう、北のほうから避難民が逃げてきちゃう。

—— 日本人ですよ。

高橋 日本人。随分、避難民が来るなと思ってた。そして駅で止まると、「あなたがた、どこから来たの」って聞くから、「こういう所だ」と答える。すると「日本、負けたですよ」って言うから、「冗談、言うな」ってわけだ。

—— その頃は知らなかったんですか。

高橋 知らなかった。我々は朝鮮にいたでしょ。そうすると、朝鮮の指揮官が関東軍司令官なんです。だから、内地が降伏しても、関東軍は降伏しないってことも言ってた。内地が手を上げて我々関東軍は手を上げないんだ、一点、残らずやるんだという考え方があったわけ。けどとにかく行こうということで、目的の綏中っていう飛行場に着いた。着いて、みそ、しょうゆ、とにかく降ろした、担いでね。そして、様子がおかしい。今度はパーロ。

—— 八路ですね。

高橋 中国共産党軍。八路軍のことをパーロって言

ってた。それにね、その綏中飛行場に着いたら、八路軍に兵隊が連れていかれたってうわさが出たんですよ。しょうがねえな、こんな所にいられねえな。それで隊長の所に連絡をしたんです。そしたら京城へ帰ってこいという連絡があったんです。それで京城へ行くんですが、まだそのときは貨車で来ていたんで、満鉄が皆さんのためにこの貨車を京城までやりましょうっていうことになった。そしたら、奉天で追い出されちゃったんです。奉天に着いたら、ロシアがからんできちゃった。

—— 満州とかあの辺りはソ連ですからね。

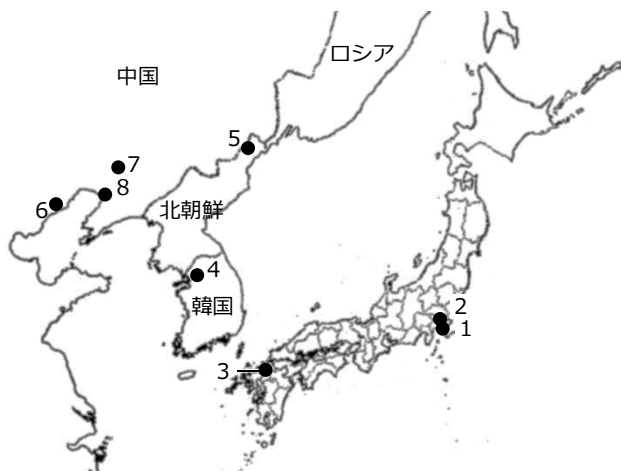
高橋 ソ連だから。ここから降りろって言う。で、そのときに私の所に2人朝鮮出身がいたの。その2人に対して、隊長は「おまえたちは日本人じゃない」と。「おまえたちはここから国に帰れ」と。そしたら、帰れといわれたって困っちゃうよね。それで帰らなかったけど、その消息は分からない。

それで我々はしょうがないから、奉天の近くに大石橋*って所があるんだね。奉天から4日かかるって、歩いて。ここはあの辺の捕虜収容所だというんです。奉天は日本人の兵隊がいたでしょ。

* 大石橋＝だいせききょう。旧満州国遼東半島の付根。

現、中華人民共和国遼寧省營口市内の大石橋市

—— そうですね。



1 佐島 2 立川 3 大刀洗 4 京城
5 会寧 6 綏中 7 奉天 8 大石橋
お話に出てきた地名の所在地 (国名・国境は現在)

高橋 そうすると、あの辺のそばを歩いていくと、今度はソ連兵がそこに来て危ないっていうんだよね。みんな軍人が負けたから。ここから出ていけって言われても、出ていく所ねえし。しょうがねえから、歩いて4日かけて大石橋で、捕虜収容所に行けば食事ぐらい食えるだろうと思って。人間、食ってさえいけば死なないってことで。ちょうどそのとき部隊長もいたから、まだ、「貴様らの命はわしが預かる」って言うんです。「いいか」って言うんです。

いいも悪いもないので、「はい、隊長に一任します」と。今度は4日かけて行こうと歩きだした。

そしたらいいあんばいに、満鉄の官舎があって、そこを歩いてたの。雨が降ってきて、そのときにちょうど日本と同じもんで隣組がしっかりしていて、隣組の組長さんと呼んできて。

—— そこら辺にはまだ日本人いたわけですか。

高橋 うん、満鉄があったから。それで、満鉄の町内会の人が迎えに来てくれて、「このまま歩いてたんじゃおまえたち体、壊しちゃう」って、隊長がね。「だからきょうはこの辺に泊めてもらうぜ」と。みんな日本人のうちだから。きょうはここで泊めてもらうということで。町内会長が、誰々さんのうちが大きいから5人、そこのうちは3人泊めてくれとか、ちょうど私が泊まった所は8人で、2階があった。四国の製材会社の人でね。

—— 木材の方ですね。

高橋 そこで世話になった。男の人は1人で、女の人が2人。2階のある寮に世話になった。

それで班長集合で集合した。今から出発するって言うわけ。そうすると「兵隊さん、兵隊さん、ここにいてくださいよ」って言うんです。みんなでどうしようかって言うから、「そうだな、戦争も終わったし、もう上官もへちまもねえ」って話になって、「それなら、捕虜になるの、よすべよ」って仲間が言ってね。「じゃあ捕虜にならねえように行くべや」。それで班長が来て、「今から出発する」って言ったの。「班長、どこ行くんですか」って。「こういう所に行くだ」って言うから、「行きません」って。

—— 反抗したんですね。

高橋 もう戦争は負けたんだから、終わったんだから、もう班長も何もないから行かない。それで班長も、「しょうがねえな」って、ずっとそこにいたの。そしたらいた所が、四国の香川県の人なんです。—— 製材会社の人ですね。

高橋 その製材会社の方は、弟に香川県の製材会社をやらせて、自分は一旗揚げるために……。

—— 満州に来たんですね。

高橋 ロシア兵が毎晩のように調べに来るんですよ。時計とか、万年筆を投げ捨ててみると持っていったらいいからとるんだよね。そこから奉天の駅まで3キロから4キロぐらいあったのかな、毎晩のように、夜中の12時過ぎると、ワーって聞こえたね。それで朝、行ってみると、はめ板だけ持っていったね。はめ板がないんだよ。

—— 床ですよ。

高橋 床のはめ板まで持っていったら。それで、こっちは負けたもんで何も手出しできないでしょ。

製材会社の人は、「いてください。いてください」って言うから、世話になった。

それで軍服でもあるとロシア兵が毎晩のように検査に来て持っていかれちゃう。ロシア兵がきたらやばいぞってわけだ。ちょうど年格好が 16 歳から 20 歳までは、前に募集があった満州開拓義勇団と同じぐらいの年なんだ。だから、「何か聞かれたら満州の開拓義勇団と言うべ」ってわけだ。

それから、こっちに来て奉天で降りたときの部隊に山積みになった小銃だとかあって、そこで手りゅう弾、1 人 2 個ずつもらい、一つは自決のために持ってろと言われた。鉄砲は 3 人か 5 人に 1 丁だけくれるの。弾は、ばら弾でもらって。「ロシア兵が来たら、これどうすんのよ」って言われて、それで銃は壊して、木は燃しちゃった。銃口の長いやつは、ある所でマンホールに入れたことがロシアに見つかったことがあって、やばいぞってわけ。「よし、考えるからいいよ、俺に任せろ」と言って、マンホールへ入って、パイプがあるからそこへ入れて、手りゅう弾もばら弾も見つかるといけねえから一応埋めて、あと砂利を上からどんどん入れて、だから兵隊の武器は何もなくなった。

—— 引き揚げはいつ頃ですか。

奉天から日本人の引き揚げが始まったのが、最初が 4 月、4 月が第 1 期。それがどういう人かっていうと、兵隊の傷病兵とか、旦那がいなくなった奥さんと子どもだけ、そういう人を第 1 回目として 4 月に輸送船に乗かって帰国ができたんですよ。第 2 回目が 7 月。奉天にうちのいない人が 7 月。奉天にずっと永住してた人が 10 月で最後の引き揚げ。

私は 7 月に引き揚げ始まったの。そのときは引き揚げ者の腕章をもらって、そこに引き揚げ者というはんこを押してある。そうすると電車も何もみんなタダ。それで舞鶴の兵舎に泊まったんだよね。兵舎に一晚、泊まって、みんな風呂入って、そのときに DDT (殺虫剤) をやられちゃって。

それで次の朝、集合して並んだら、「番号」って言われて、1、2、3、4、5、6、7、8、9、10。私は 10 番目だった。そしたら、「はい、ここまで」って言って、私で切られたわけ。それで、「ここまでの人はこっち来てください」って言うわけよ。それで部屋へ連れていかれた。引き揚げのときに、日本にはもう男の子はいなくて、みんなソ連の炭鉱に連れていかれたかったという。そしたら、「はい来て、はい次」って言われて、呼ばれた人間が帰ってこないんだよね。いよいよソ連に連れてかれちゃうのかなと思ったの。で、私の番になった。そしたら、アルバイトがいて、軍人もいた。満州の兵隊かなんか

いた。で、質問するから正直に答えろという。満州の新聞や状況を聞かれたんですよ。ということはソ連の軍事行為が違反ではないかを聞かれたんだね。それで、終わると向こう側から出るんだね。

—— だから帰ってこないんですね。

高橋 そう。それで香川県の「大谷さんが帰ってきたぞ」って言って。そしたら大谷さんが、「おめえたちよ、帰っても日本にうちがあるかねえか分かんねえぞ」って。そのときに 500 円かな。

—— 相当な額ですね。

高橋 「これ、おめえたちにやる」と。それからシャツだ、服だ、ズボンだといって、布張りでリュックサックを作って、その中へ入れて、「悪いけど持っていってくれよ」と。それで、「もしうちがあつて親もいたならば、悪いけどその 500 円とこの衣類を送ってくれよ」ということで預かってきた。

それで 2 年目に行った。四国の屋島の旅館を取って、記念品として大皿を買って。香川出身の人に新聞記者を呼んでもらって。記者が「皆さんどういう集まりですか」って聞くから、「満州でみんな大谷さんに世話になった人ばかりです」ってわけ。

こうして香川県でもって、世話になった大谷さんにお礼をしたわけです。

—— 特幹第一期生の募集から、最後は引き揚げまで長いことお話をお伺いしました。本当にありがとうございました。

【付記】

高橋金太郎さんは、大正 13 年 (1924 年) 11 月 11 日生まれで、インタビュー当時は満 91 歳でしたが、平成 29 年 11 月 22 日にお亡くなりになりました。戦争に挑む当時の若者の心情や様々な戦争体験の語り部となっただき、深く感謝すると共に謹んでご冥福をお祈りいたします。

金太郎さんの「死というものに違和感はなかったね」という言葉の重さ、この言葉を生み出した時代背景とそこに生きた一人の人間の考えを、戦後 75 年を経過した現在、「昔のこと」としてかたづけるのではなく、「歴史」として学び、語り継いでいくことが大事でしょう。

(インタビュー編集：郷土資料室 佐藤明生)

あとがき

郷土資料室通信第 5 号をお届けします。今号では、市民のみなさんの貴重な体験談として、高橋金太郎さんのインタビューを掲載しました。このような語り部の記録は、市史編さん事業期間中に刊行した『市史研究横須賀』に「市民が語る横須賀ストーリー」として合計 15 本掲載したほか、戦争体験や学童疎開に関する手記や座談会の特集号 (第 15～17 号) があります。合わせてご覧ください。